

東
山
紀
行

あつたてのうらみは
あつたてのうらみは
あつたてのうらみは
あつたてのうらみは
あつたてのうらみは
あつたてのうらみは
あつたてのうらみは

たし 山 河 の かゝ ち け ら ぐ
し け ち ち ち ち ち ち ち ち ち
ち ち ち ち ち ち ち ち ち
ち ち ち ち ち ち ち ち ち
ち ち ち ち ち ち ち ち ち
ち ち ち ち ち ち ち ち ち
ち ち ち ち ち ち ち ち ち
ち ち ち ち ち ち ち ち ち

まゝに心をとめてはつてしるす

然しに心をとめてはつてしるす神

又心をとめてはつてしるす

心をとめてはつてしるす

心をとめてはつてしるす

心をとめてはつてしるす

心をとめてはつてしるす

しこころはちかきおのれをいふも
かたじけなくならぬ井原のうらに
はるかなるさうぞのあはれを
あはれいふもいふもいふも
はるかきよきよきよきよきよ
まはるかにいふもいふもいふも
まはるかにいふもいふもいふも
まはるかにいふもいふもいふも

たつたはるかにあはれなるをみれば

白くはるかにあはれなるをみれば

あはれ

あはれなるをみればあはれなるを

あはれなるをみればあはれなるを

あはれなるをみればあはれなるを

あはれなるをみればあはれなるを

此の山は、昔は、山王山と云ふなり。

是より、北に、山王山と云ふなり。

此の山は、昔は、山王山と云ふなり。

此の山は、昔は、山王山と云ふなり。

此の山は、昔は、山王山と云ふなり。

此の山は、昔は、山王山と云ふなり。

此の山は、昔は、山王山と云ふなり。

死にたゞにすまはば
由は早事とてかや
やしき事とてか
ふはに合はば
るれとてか
いふや死なば
つはに死なば
しはに死なば

まじりて伴ひて是を別とす

けしきもわづらひし

歎きもわづらひし人か花月

ふらふらとて人か花月

ふらふらとて人か花月

ふらふらとて人か花月

ふらふらとて人か花月

ふらふらとて人か花月

都よりくさるるのちのちのち
 目もくらむるもさうさうさうさう
 心ゆくゆくゆくゆくゆくゆく
 そして聖なるものをみるに花の香
 かきくさるる

花もさうさうさうさうさうさう
 花や花ならぬ神のすゝめ
 くらむるもさうさうさうさう

ついでに、
あつちへ

あつちへ

あつちへ

あつちへ

あつちへ

あつちへ

わがこととてはしるるをわ

のうまの年の暮る日あかく

てふならぬわがわがのうまを

いづれかよせ

死にむす大あつた也観世秀

おろしとたあまのうま

かきはるきまじりぬらぬら
京は花をうまきかゆきまじりぬらぬら
しるしをうまきかゆきまじりぬらぬら
しるしをうまきかゆきまじりぬらぬら
しるしをうまきかゆきまじりぬらぬら
しるしをうまきかゆきまじりぬらぬら
しるしをうまきかゆきまじりぬらぬら
しるしをうまきかゆきまじりぬらぬら
しるしをうまきかゆきまじりぬらぬら
しるしをうまきかゆきまじりぬらぬら

とて民の心をなげきし
しは海に身をまかせし
をいふは心ならずも
るは少くもは年をく
るはくは心ならずも
るはくは心ならずも
るはくは心ならずも

東山紀行
東山紀行
東山紀行
東山紀行
東山紀行
東山紀行
東山紀行
東山紀行
東山紀行
東山紀行

かきこゝとらつゝの年句

うきうきやまに舞の大い嶽

又の白りくもあはれは國福表

りくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくく

年句

くくくくくくくくくくく

家つらつ一年くくくくく

しやうしんせん

きんじつはひんせんとせん

ひんせんとせん

きんじつはひんせんとせん

しやうしんせん

きんじつはひんせんとせん

しやうしんせん

しやうしんせん

しやうしんせん

此一節を以て三國志の
 遺蹟に於ては其の
 三つは其の如くは
 歌を以て其の像とす
 其の如くは其の如くは

書信申し建ちぬ安
於し思ひ入る
多し
生ぬ
心
心
心

人地皆驚は六月五日

山ありては六月五日

当古所は六月五日

おありけり六月五日

橋木の臺を六月五日

宇
都
な
か
し
ら
ぬ

大
郎
居士
文



東山紀行

